雪の喪章

水芦光子

雪の喪章

水芦光子

東都書房版

雪の喪章　　¥350

昭和34年11月28日　第1刷発行
昭和41年10月15日　第2刷発行

著　者　水芦光子（みずあしみつこ）
発行者　佐藤鉄男
印刷所　豊国印刷株式会社
発行所　東都書房
東京都文京区音羽町3ノ19
電話東京(942)1111　振替東京72732

© M. MIZUASHI 1959 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえします。
（製本・大製KK）

目

次

序……七
そのひと……一〇
鴨料理……三〇
深淵……四一
谺……五三
秤が揺れる……五九
灰燼……六八
燃えなかったもの……七六
氷室……八五
青いデンキの病院……九九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

凄惨な団欒……二一五
施療院へ……二二三
春はからし菜……二三五
留守家族……二四四
ある画会の挿話……二五二
帰郷……二六八
二つのあいびき……二七八
告白する女……二九二
金と銀……二九八
彷徨する女……三〇九

装幀・鈴木義治

雪の喪章

序

雪が空からおりてくる日は、その雪の襲い方とおなじ速度と密度で、地の底からも響いてくるものがある。

地の底で敲(たた)いている鉦(かね)の音かもしれない。

異様な、雪のしずかさを、聞きとがめる妙子は、朝から点(つ)けっぱなしにしている電燈のせいもあって、まるで時間の観念をなくしていた。今しがた、息子の彦一と、その婚約者が帰っていったあとの、ひとり取残された思いまでが、いっそ遠い過去のなかのことでもあるかのように、うつらうつらとしている。どうかして、廊下の奥のはずれで、客を案内してくる若い女中の声が、びっくりするほど美しかった。

金沢で、指折りの旅館「くすもと」の、女主人にいまはすっかりなりきっている妙子に、そんな女の声が、ふとその過去のなかから、谺(こだま)してくるもののようにひびいてくるのは、こうしたときなのである。

毎年、年の暮にすます法要が迫っていた。

とかく妙子に、仏壇の前に坐りがちの日がつづき、いまもその膝におかれた小さな過去帳には、姑りつ、良人狭山国夫、長男京太、そして、もと、この旅館主であった楠本せいの名が記されてある。それから、極く最近加えられた、日下群太郎という名――これらのひとびとは、彼女にとって、懇(ねんご)ろに法要を営むべきひとびとの名であった。そしてそのあと、むしろあかの他人と呼んで忘れ果ててしまいたいひとびとでもあるのだった。

彼等は、偶然にも、雪の日に、ひとりずつ死んでいったのだ。そしていま、妙子がとらわれている思いというのも、その雪にまつわる憶い出であり、彼等を襲うた雪の誘惑に、ひょっと自分も誘われてみたい奇妙な気持であった。彼女にとって、雪のあの精緻な結晶体は、不吉な、忌わしいものの象徴であると同時に、この上なく美しく妖しげな、なにかの霊魂のようにも思われる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

彼女は、先刻はじめて見た息子の婚約者に、早速、法事に来るようにと言って、母らしい好意をしめしたのだが、自分のそうした過去と、全く切離されたところに、新しい絵の具を絞ったように新鮮な、その女の世界に、無性に懐しいものを覚えたのだ。

「ほゝゝゝ、これがこの家の最後の法事でしょうよ。法事はもうこれで沢山。もうそして、私たちは、生きているひとのことだけ考えて暮しましょう。ほゝゝゝ、生きているひとだけの愉しい世界よ！」

急に別人のように、明るく笑いだし、はなやいで言うこの母の言葉を、若い人たちはどのようにとったであろうか。

そのひと

妙子が嫁いできて、一ヵ月目に遇った狭山家の法要とは、――

昭和の初年ごろで、その日はすでに、歳の暮も押し迫った、商家では格別忙しい日であったにもかかわらず、百人近くの客が、狭山家先代の一周忌に集ることになっていた。一ヵ月前、一応、若い主人、狭山国夫の結婚の披露に招待された人たちばかりで、美しい白無垢に緋の裲襠をはおった藹たけた花嫁を見にきた客は、また今度は、一層あでやかな丸まげ姿の妙子を見るためにやってくるといっても言い過ぎではなかった。

それほど、狭山の嫁、妙子の美貌は市の評判であり、先代の一周忌も済まさぬうちに、狭山家で獲得せねばならなかったほど、多くの縁談の持主であったのだ。兄の代になって落ち目に

なったというものの、砂糖問屋の桐野と言えば、市の長者番付の中ほどに名を連ねている。市の旧い宗教女学校に通っていた頃から、道のどこかで投込まれる鞄のラヴレターに困らされたが、彼女が美貌によって受けた被害の、それが最初のものであったかも知れなかった。

そんな手紙を、嫂や女中がおもしろがって声を出して読むのを、当の妙子は、ひとごとのように隣りの部屋で、着換えをしながら聞いていた。顔を赫らめるでもなく、笑いを振りまくでもなく、せっせと自分の躰からスカートや靴下を剝ぎとっていたが、そんなことで美人意識を与えられるより、不当なものに責められる感じの方がつよかった。自分は何もしていないのに、……実際彼女はまだ何もしていなかったのだ。内気な、もの静かな娘であった。

狭山の方も、そんな妙子を迎えるに適わしい条件をそなえていた。先代は、箔商として、一代で財をなした人である。一年前、脳出血で急死すると、東京の大学へ行っていた一人息子の国夫が、在学のまま跡目を継いだが、事実は、母のりつと、番頭の日下群太郎が一切をきりまわしていた。そして地方の新聞は、国夫の卒業を俟って、業界の革新的な少壮実業家として紹介した。その新聞記事を持参して、りつが直接に人力車で、桐野家へ日参した。芸ごとに通う妙子を見て、一目惚れの結果であったが、国夫もやがて、母親とおなじ熱にうかされたもので

ある。

国夫が、この地方の業界に珍しく学力をそなえた前途有望な青年であり、派手な商売に似合わず、花柳界の出入りもほんの交際程度で、浮いた話ひとつないことが、多くの縁談を斥けて、この結婚を決定させた。

式の前夜、町の往きずりの人々の眼が、まごつくほどの夥しい嫁入道具の油単が、そろいの法被姿の使用人のかざす定紋入りの高張提灯にあかあかと照らされながら続いて、冠婚葬祭に贅をつくすこの町の人々の、恰好の話題となった。

謂わば、こんな結構づくめの条件をそなえた花嫁の雰囲気を、人々は、その日もまた思い知らされる訳であった。

朝の七時ごろ、髪結が来て、りつと妙子とは、鏡台をならべて、丸まげに結った。

東京の柳屋の丸まげの大型と、鴇色の鹿の子のてがらが、わざわざ、りつの手で、妙子のために取りよせてあった。

先代の二号で、東遊廓きっての三味線の名手と言われる仙女が、菊野と言う若い妓をつれてやってきたのは、二人の髪が、結上った頃である。先代の供養に、「吉原雀」を弾くように、

りつに頼まれたものだが、何を感違いしたものか、仙女は、正月用の、紅白の餅花を沢山つけた紅鯛(べんだい)の大ぶりの枝を、菊野の肩にかつがせていた。先代が景気のいいことが好きであっただけに、この女のこうした型破りも、却って座を賑やかにして、りつも上機嫌で、枝にぶらさがった千両箱や、金のえびす様に触り、御法事と正月と一緒に来ましたぞと、早速鴨居に吊るさせた。

仙女は控座敷で、唐津の火桶に煙草をひとしきり埋めていたが、りつの部屋で妙子たちの着付がはじまると、尻かるく起ってきて手伝った。眉も眼も吊上って、顔の造作が生れつき、芸者顔にできているこの年増女は、そのきつい顔の表情を少しもくずさず、若い人々の笑いころげる冗談や猥談をやってのけて、座を浮々とさせる術を心得ていた。

男のように低く錆びついた声も、聞き馴れた者には魅力があった。妙子の喪服の黒塩瀬の帯を、かるがるとしごきながら、

「お姑(かち)様、」と、りつに呼びかけた。

「去年の今ごろは、あなた様も、私も泣きました。……泣き泣き、お棺のなかに、私がそっと入れて差上げましたものは、何かとお思いになりますけ？　大旦那さまの大好きな大好きなも

のを入れて差上げました。……ふゝゝゝゝ枕絵ですが！　枕絵抱えて、三途の川渡るお人さまいうたら、ここの旦那さまぐらいのものですげ。」

すっとぼけて喋る仙女に負けず、りつは、合せ鏡のなかで、こっくりうなずいて、

「ふゝゝ、あんたのやりそうなことや。」

「男らしくて、金づかいのよろしかったこと。」

「……」

「あとにもさきにもござんせなんだ、立派な旦那さまで……よほどの功徳をつんでゆかれな、わたしもこうして家内へは招んで貰えませんわに……。」

と笑わせたあとで、本妻の機嫌を結ぶことも忘れない。

この家の儀式ばったことに、この種の女は二、三ならず集ったが、先代はなにかというと、派手に芸者を侍らすのが常であったし、りつにとって、先代の死後もおなじように彼女たちを扱っている自分の度量のしめし場所は必要であった。こんなことが、いかにも商売の繁栄を思わせ、店の貫禄ともなった時勢であった。

妙子の着付が終ると、さすがにお喋りの仙女も、はっと口をつぐんで、妙子に見とれねばな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c